わこのみ
猫蓑通信
第62号
平成18年（2006）
1月15日発行
（年4回発行）

連句一巻のメリハリ

青木秀樹

平成十八年度の国民文化祭は山口県で開催される。開催種目が縮小され、開催種目から連句部門が外されたが、山口県内の連句人が諏訪欣二氏（猫蓑会会員）を会長に「やまぐち連句会」を結成し、県に働きかけた結果、きらめき公募事業として連句大会が開催できることになった。十一月十日（金）十一日（土）に岩国市（現在は由宇町）での開催となった。正式種目の場合と違って運営体制が手薄な上に予算規模も小さく、やまぐち連句会の方々の手弁当での準備作業のご苦労が思いやられる。半歌仙での募吟も行われ、文部科学大臣奨励賞以下の表彰も例年通りに行われる予定である。資金的な面を含めて多数の応募が期待されている。

私は国民文化祭の連句作品の選にあたっては明雅先生のなさったやり方で、応募作品を丁寧に読むように努めている。作品は「付けと転じ」を中心に吟味するが、付け味のわからない所で立往生することがしばしばある。多数の作品を読むには相当なエネルギーがいることを痛感している。

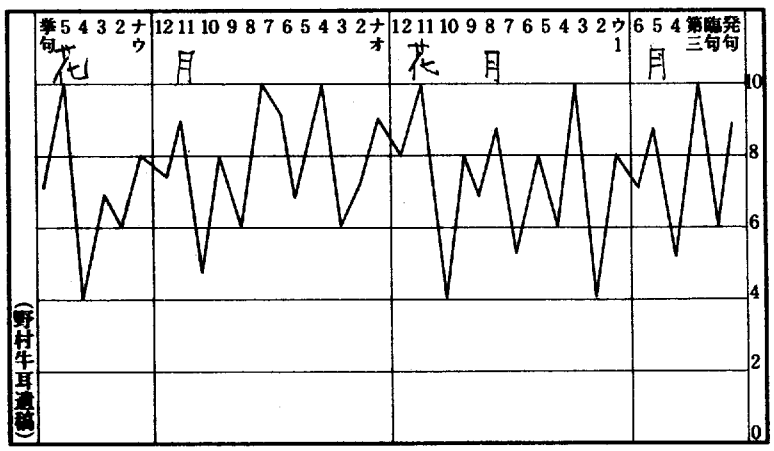
運営上の理由で募吟形式が半歌仙となることが多いが、それがベストだと思っている人は少ないだろう。半歌仙は不完全な形式であるため、一句一句の面白さや鮮やかな付け・転じに目が行き勝ちで、勢いのある作品が多く入賞することになる。

それにくらべて歌仙は成熟した形式であるだけに、一巻の構成に古来の規範があり、序破急や一巻の展開にメリハリがあることが求められる。また、芭蕉翁の言ったように新しさの追求も重要な要素になる。昨年度、私は「一巻の構成」と「新しさのあること」を重視した結果、すでに発表された作品集に記載されたような選になった。

連句一巻の出来不出来は内容の変化・調和の妙がポイントであり、序破急の如何が勝負どころである。連衆の出す詩趣のある付け句には才気煥発あり、ロマンあり、世事の描写あり、時局の風刺ありと、まさに連句は世態人情諷交詩である。連衆が突っ張りあっている作品を緊張感があってよいという者がいるが、私は芦丈師の言葉として伝えられている「夜店のステッキ」のような作品は品劣るものとしたい。

都心連句会の会長を務められた大林杣平氏著の『双樹譜』の中に、当時モダン派といわれた野村牛耳氏の遺稿として「長の高低表」というものが掲載されているので、ここに紹介したい。これはあくまでもイメージとしての試案であるが、一巻のメリハリが示されているので、一巻の展開を考える上で参考になるのではないだろうか。

物理的理想型長（たけ）の高低表



芦丈・秋香

両吟歌仙「草枯るる」の巻評注

東　明雅

今年は芦丈先生の三十三回忌に当り、三月法要を予定している。考えてみれば、私は今まで芦丈先生について、いろいろ語って来たが、その作品を直接紹介した事は余りなかった。この「草枯るる」の巻は芦丈先生が、折から行脚中の俳友茂木秋香翁を伊那の芋庵に泊めて、両吟で巻かれた一巻である。

昭和八年三月十二日の日付が入っているから、先生はこの時六十歳、前年に停年退職し、伊那に帰って俳諧三昧の生活に入っておられた時である。相手の秋香翁は七十一歳、武蔵国（埼玉県）深谷の豪農、二人とも上野国（群馬県）鳥渕の巨匠下平可都三の弟子であったところから、特別な親交があった。

この一巻は、先師お気に入りの巻だったようで、私の「芦丈翁俳諧聞書」にも一部分が掲載されている。三十三回忌を機に先生追善の意味をこめて、ここに披露する次第である。

草枯るる　　両吟

蔓草のヒシと音して日に枯るる　　芦丈
涸れつくしたる流れ白々　　深谷秋香

落とし行く箆鷺（しらさぎ）の糞憎がりて　　丈
竹筒にさす張りさしの傘　　香
月の主五位など誇る顔もせず　　丈
本草目に合はす茸の名　　香
ウ　忌鎌に冷ゆる藪根を刈りすかし　　丈
十ぅも二十も鼬仔を引く　　香
貰ひ手もなき古家の雨の漏り　　丈
むんずと掴む幽霊の裾　　香
胸の火の焔の先や恐るべし　　丈
蚊の針痕のはれし拾ひ児　　香
月の出て青芦原の一トそよぎ　　丈
俵の明きに囲ふ雪隠　　香
へら弓に過ぎたうつぼも顔めたし　　丈
竜か蚯蚓か判かぬ画もかく　　香
ちる花の障子にうつる西日影　　丈
とうとう雉子に交まれし鶏　　香
ナオ　頼まぬに田打ちが畑を打ってやり　　同
阿弥陀冠りの伊那谷笠鳴る　　丈
真白な雲黒雲に追ひ抜かれ　　香
主従の話し絶えつ続きつ　　丈
がらがらと筆も濯がず簀に捲いて　　香
波の穂白く縁柱噛む　　丈
還御沙汰なくてさっさと年は去に　　香
瑞々として碧き山松　　丈
燼（もえさし）で岩に一偈を書きおろし　　香
身は露の身の罔両（かげぼうし）を友　　丈
騎りすての駒のいなく月あかり　　香
碓氷の碓の水も澄む秋　　丈
ナウ　買手待つ餅の次第に肉の落ち　　香
継ぎ足し庇頭つかへる　　丈
無理やりの戯れが今は真ン誠　　香
大奉書に晴れる目録　　丈
盃の名も武蔵野の花のかげ　　香
霞一ト引き見渡しの山　　丈

昭八・三・一二　於芦丈亭　満尾

発句と脇　　三月十二日は歳時記では仲春の頃であるが、寒国の信州ではまだ冬景色。発句は芋庵の嘱目。脇は天竜川の景。

ウラ　二句目～九句目。　このあたり両巨匠の丁々発止の付合の妙が存分に発揮されている。連句のおもしろさの一つは確かにこのようなところにあろう。（「芦丈翁俳諧聞書」三七頁～三九頁参照）

ナオ　折立。　この句は恋句の呼び出しかも知れないが芦丈先生は応じておられない。

ナウ　三句目・四句目　これで恋が成就。花の句、武蔵野。大盃の名。飲み（野見）つくされぬという謎　この花の句、前句によく付いて格調の高い好句。

猫蓑通信第三十八号より転載

第二十六回俳諧芭蕉忌

平成十七年十月十九日
於・江東区芭蕉記念館

役割

宗匠	坂本　孝子
脇宗匠	橘　文子
副宗匠	八代　嫋
執筆	久保田庸子
知司	根津　忠史
副知司	山田　華蔵
座配	佐々木有子
座見	西田　一枝
花司	式田　恭子
香元	鈴木千惠子
配硯	山本　要子
同	横山　わこ
同	松島アンズ
老長	原田　千町

第二十六回俳諧芭蕉忌

脇起り二十韻

「木枯や」

木枯やたけにかくれてしづまりぬ　翁
　時に高きは寒禽の声　秀樹
ミシン踏み絹のブラウス仕上ぐらん　清子
　ハッカドロップロへひと粒　有子

ウ

潮騒のゆすり出したり小望月　千町
　忘れ団扇に想ひびとの名　わこ
万聖節幼馴染の結ばれし　華蔵
　協奏曲の調べ妙なる　要子
捨て猫と思へぬ程の品の良さ　嫋
　覆面作家ベストセラーに　文子

ナオ

みちのくの旅の栞の文字摺草　アンズ
　月の山小屋酌み交す酒　郁子
知らぬ間にフィギュアコレクト癖になり　政志
　魔法の杖も効かぬこの恋　恭子
媚薬飲み夢千年を共にせん　一枝
　儘にならない少子化対策　忠史

ナウ

前垂れの色も褪せたる地蔵尊　利子
　レガッタの岸後へ後へと　千惠子
花惜しむ母校の門に肩を組み　孝子
　いつか帰りし春耕の人　執筆

平成十七年十月十九日首尾
江東区芭蕉記念館に於て興行

東明雅先生三回忌

二〇〇五年十月二十日は、はや明雅先生の三回忌です。

その前日、十月十九日、猫蓑会定例の芭蕉忌当日、台風二十号の襲来との予想で、雨が心配されましたが、朝は傘要らず、次第に雲も失せて、晴男だった明雅先生のおかげで好天となり、日中は二十度近くまで気温が上りました。

正式俳諧に引き続き、先生のお写真の前に花を捧げ、明雅先生発句の脇起り二十韻を十二席で興行することが出来ました。

明雅先生の考案された二十韻は、芭蕉忌のような行事を行い、その後の短時間で興行する場合に最適の形です。制約の多い表を四句で済ませ、連衆が一巻をじっくり楽しむことが出来ます。

多数の猫蓑会員が集い、明雅先生を偲びながら、先生の発句で脇起り一巻を造ることは何よりの追善と思います。

先生もご覧になって居て下さることでしょう。

明雅忌脇起二十韻

「虫鳴くや」　坂本　孝子　捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪　明雅仏
しきりに匂ふ木犀の月　孝子
秋灯鼓の朱房引き締めて　壽子
深層水で淹れるコーヒー　啓子
ウ アスリートいづれ劣らぬ美女揃ひ　利子
愛もて癒す疲労骨折　豊美
くすくすとくすぐったがる撫で佛　啓
ローカル線は今日も満員　壽
蟹を売る媼の髪に雪しぐれ　美
長元坊を馴らす鷹匠　啓
ナオ 酒辛し上司の噂肴にし　利
赤白黄色ジェリービーンズ　美
逢びきのホテルの窓に河ひらけ　美
仮面の恋を誘ふ舟唄　啓
しなやかに月あびてをり蛇の衣　美
籐の寝椅子に洋書数冊　利
ナウ 靖国の参拝に読むタイミング　利
IT社長春のひらめき　壽
邯鄲の枕に結ぶ花の夢　孝
すみれたんぽぽ咲き満つる丘　壽

連衆　杉山壽子　小池啓子　梅田利子　高橋豊美

「夜長かな」　中田あかり　捌

割箸と語る楊枝の夜長かな　明雅仏
豆名月の軌道群青　あかり
母さんは案山子の衣装縫ひあげて　守男
鏡掛はね直す襟もと　一恵
ウ 世界一綺麗と鸚鵡に教へこみ　美恵
もしやと思ふ人にばったり　たつみ
モデルにと請へば見張の付いて来し　美
時給千円雇はれの身よ　一
鉄鉢の霰にまじる宝籤　男
魑魅（すだま）とどまる冬の本陣　み
ナオ 選挙戦女の刺客あらはるる　一
クレンジングで仮面落して　美
働いて働き抜いてつかむ縁（ほぎ）　み
薄雪草の清らなる祝　美
崩れゆくケルンを惜しむ月の影　同
検査病棟足早に過ぐ　り
ナウ 軍歌より軍歌で終る戰友会　男
大杯ふつと止まる初雷　美
花吹雪角櫓へと流れけり　男
山裾めぐる川のうららか　一

連衆　近藤守男　山崎一恵　山口美恵　山寺たつみ

「実朝の」　本屋　良子　捌

実朝の伊豆の大海雁渡し　明雅仏
やあやあと来て賞づる月の出　良子
新蕎麦の香り楽しむ師と共に　秀樹
ボリュームしぼり流すCD　佳之子
ウ チケットを求む行列十重二十重　弘子
今様の襤褸みごと着こなし　一枝
またしても甘え上手に騙されて　樹
元の亭主がそっと顔出す　之
年甲斐もなしに興ずる水鉄砲　弘
葦原雀かしましきこと　良
ナオ 官邸に夜討ひたすら首相番　弘
勝負師ときに神を拝み　枝
眠りつつ笑ふみどり児膝の上　之
豊かな胸は親ゆずりなる　弘
月光を浴びて狐の美女に化け　樹
雪しらじらと積もるきぬぎぬ　之
ナウ キッチンのコーヒー碗で迎へ酒　弘
ほどよき味に鮎の子を炊き　良
満開の花のしだるる阿弥陀堂　之
ふらここ揺れる分校の庭　枝

連衆　青木秀樹　染谷佳之子　松原弘子　西田一枝

「物言はぬ」　佛渕　健悟　捌

物言はぬ像の翁や秋の風　明雅仏
猿笛を吹く昼月の庵　健悟
新走友の便りを待ち詫びて　わこ
簡単だねと覗くケータイ　美奈子
ウ夏きざす絞りの里は税上げ　利子
身の置き処あるかなきかに　央子
婿殿に天下とらせて子沢山　美
妬かせじゃうずのプレーンオムレツ　利
ネタ探すパリの雀は朝市に　美
冬ざれの石包むふろしき　こ
ナオ寒潮の二すぢ三すぢ銀を刷く　央
瞽女がしゃがめば寄ってくる猫　美
抑へても抑へても肌ほてるまま　同
サプリメントの効き目あらたか　こ
蝉生るる混凝土(コンクリ)の街照らす月　同
監督兼ねる選手登場　央
ナウ裏表のっぺらぼうの世のなかに　こ
園児を引いて野遊びにゆく　央
花の雲湧き立つけふの金鯱城　利
地球市民に春の挨拶　執筆

連衆　横山わこ　鈴木美奈子　武村利子
遠藤央子

「残菊や」　峯田　政志　捌

残菊や翁ゆかりの湯の匂ひ　明雅仏
山の挟間を昇りくる月　實
美術展百号の絵を並べぬて　弘子
廊下の隅に煙草くゆらす　政志
ウアメリカのフェローシップでほしきまま　かりん
IT長者妻もとてシャン　アンズ
楽園のあちら側にも妬み種　ん
開かぬ踏切小雨降りつぐ　實
お歳暮の挨拶受ける虎毛猫　ズ
さっと卵を入れる雑炊　弘
ナオ校訓はいまも清廉潔白と　ん
遊就館に思ひ様々　同
貢いでも貢いでも彼抱きもせず　弘
蠍の性の焔燃やして　ズ
行水の盥の月を捨てがたく　實
風の一すじ通る裏庭　弘
ナウ長生きし生きかたじょうずの本も売れ　ん
雛祭にりぼんひらひら　ズ
花浴びて出航の銅鑼遠く聞き　志
二合半に酔ひ春の暮行　實

連衆　梅田　實　市野沢弘子　登坂かりん
松島アンズ

「味はひは」　長崎　和代　捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな　明雅仏
真青な空にほのと昼月　和代
学帽に蜻蛉ひとつ止まりゐて　泉子
向ひの家に引っ越して来る　華蔵
ウ片襷そば打ち名人取り囲み　淳子
デートの合図口笛を吹く　要子
一行のメールで足りる近い仲　蔵
男は保存女は上書き　泉
水鉄砲思はぬとこへ飛んでゆく　淳
円座に坐り朝の勤行　淳
ナオ義仲を誇りとしたる木曾の村　蔵
延命が売り町営の出湯　要
わらんべは三和土の靴を数へてる　泉
ゆたんぽ代はりに足をからませ　要
月凍つる歩哨に佇ちて妻を恋ふ　泉
デカンショ節は聞かぬ平成　同
ナウ刺客とて毀誉褒貶の姦しく　要
定年過ぎて柔東風の中　蔵
穴馬の勝利に酔ひて花吹雪　淳
春告鳥の鳴き渡る山　蔵

連衆　青木泉子　山田華蔵　上月淳子
山本要子

「厨事」　村田　冨美　捌

ちちろ啼く古稀で始めし厨事　明雅仏
月見団子の形は不揃　冨美
ダンディーに秋のブレザー羽織るらん　路子
久しく訪へばビルの林立　庸子
ウ 曲がり角焙じ茶の香の懐かしく　常義
母が母がと髯の大供　同
独身の隣のバツイチ気に掛り　路
レース編みゐて酒はウワバミ　庸
まろび寝にどんと落ちたる日雷　同
巨石重なる奥飛騨の谷　義
ナオ ジャズダンスノリの良い子も乗れぬ子も　路
郵政法案一転賛成　庸
出来ちゃったどんな嫁でもひと安心　路
授かりし嬰般若波羅密多　同
懐手抜き差しならぬ月凍てて　義
ねねの小道に壷を商ふ　庸
ナウ 中高年引き連れ山のリーダーに　同
喉をならして仔猫擦り寄る　路
分校の庭の華やぐ花大樹　冨
ジグソーパズル遅日悠々　義

連衆　倉本路子　久保田庸子　生田目常義

「道後の湯」　佐古　英子　捌

道後の湯明治の窓の十三夜　明雅仏
ぬくき新酒に酔も格別　英子
運動会応援団を引き受けて　郁子
トートバッグにビデオデジカメ　雅子
ウ 曲独楽に惚れてあっぱれ初舞台　好敏
ごつい手足のをんな抱き寄せ　恭子
数ばかり多くなりたり過去の人　英
秋葉原にはチラシひらひら　郁
産卵の場所を求めて正覚坊　雅
縁台将棋待ってましたと　敏
ナオ 比例区の小粒ちゃっかり拾はれて　恭
グランドピアノ蓋を全開　英
老いてなほ髪むらさきに魅かれをり　郁
心虚ろに雪安居する　雅
食積を月めでたしと覗き込み　敏
隣り気になる嬰の泣き声　恭
ナウ モザイクのモスクの瓦礫かき分けて　英
夢かまことか鐘の朧に　郁
はんなりと一竹斎の花衣　雅
ボートレースに勝ちて流るる　敏

連衆　東　郁子　武井雅子　豊田好敏　式田恭子

「紫式部」　松本　碧　捌

色も香も紫式部か小式部か　明雅仏
月の舟ゆく水脈の耀　碧
竪琴を払へば音のさはやかに　千町
エスプレッソを熱々に淹れ　千恵子
ウ マスターが待ち望んでた駅ができ　鐵男
制服似合ふ八重歯かはいい　碧
釣り合はぬ縁といはれて深い仲　町
葉書たてよこほぼ黄金比　子
投げこんだ剛速球に汗が飛び　男
ハンカチを噛むスタンドの母　碧
ナオ 昨晩の悪夢は貘に食べさせて　子
書院造りの座敷牢なり　町
ばか囃子てれつくてんの好きな殿　男
止まらぬ嚏止めてあげたい　碧
月の下抱かれて私雪女　町
酒場の客に秘密それぞれ　子
ナウ 今度こそ埋蔵金はこの地点　男
観音の道かぎろひてをり　町
千本桜その一本の花ふぶく　碧
ファインダーにみる暮れかねる頃　男

連衆　原田千町　鈴木千恵子　林　鐵男

「水の秋」　中野　昌子　捌

水の秋昔深川橋幾つ　明雅仏
小菊の鉢の並ぶ路地奥　昌子
月昇る夜間授業のざはめきに　士郎
いつもの時間通るチャルメラ　暁巳
ウ　愛犬のロゴ入りの服また替へて　靖子
男四、五人捌く凄腕　達子
陰間茶屋声変りしていたぶられ　士
階段箪笥きしむ抽出し　巳
富士映す湖に裸子丸洗ひ　達
昆虫採集親が熱中　巳
ナオ　将来のＩＴ大尽夢に見て　士
飴玉ひとつ口に投げ込む　靖
バスケット主将の気迫眩しかり　巳
ランチ・シネマもダッチカウント　達
酉の市仰ぐ人なき月皓々　同
海底静か歩む魴鮄　士
ナウ　本当のスローライフは多忙なる　靖
独りのどかな酒もまた良し　士
花びらよ千の風吹く雲に乗れ　昌
上がるひばりにとばす飛行機　巳

連衆　横井士郎　島村暁巳　関口靖子
篠原達子

「冷まじや」　青島ゆみを　捌

冷まじや血もて綴りし慎機論　明雅仏
不忠の文字身に入みるなり　ゆみを
月の夜がもったいないほど明るくて　あや
やうやく揃ふ輪唱のキー　文子
ウ　貸切のタンデム自転車乗りこなし　忠史
曲芸団の飛びはねた恋　未悠
わが女神気になる髪の乱れ様　文
三蔵法師道は半ばに　史
宇宙から秦の長城ながむ夏　悠
Ｔシャツ社長触手伸長　文
ナオ　思ひだし笑ひなんぞも見事撮り　や
寝たふり烏賊に烏だまされ　史
どの賞が当たってもいい文学賞　や
今度はどこにピアスつけよう　史
冬月に溶ろけてしまふ抱擁を　悠
媚薬と化する唇の燗酒　文
ナウ　ありがたのおまんだらだと婆ながめ　や
墓穴を出て登りたる丘　文
白帝城はやも囲みて花蕾み　を
奴凧揚げ微笑の人　悠

連衆　中林あや　橘　文子　根津忠史
棚町未悠

「荒神も」　鈴木　了斎　捌

荒神も夜寒か露の灯がひとつ　明雅仏
どぶろくに透く玻璃杯の月　了斎
白猫とコスモスの道帰り来て　文代
回覧板を斜交ひに読む　久美子
ウ　顎鬚も頬髭もゐる六本木　嫋
誘ふ言葉はまるでイタリア　有子
ケータイに姿態さまざま盗み撮り　久
海鼠の黒く蟠（わだかま）る底　有
岩盤のずれの極みに地震兆す　久
暗証番号すぐに失念　代
ナオ　いってきますぽーんと投げたランドセル　有
大道芸は免許皆伝　嫋
月代に孤独の猿の夕涼み　代
秋を待ちつつ彼を待ちつつ　久
抱き合うて沫雪羹のやうに溶け　嫋
衝動買ひをクーリングオフ　同
ナウ　障子背ににつこりと笑む師の遺影　久
柱時計の音が聞こえる　有
散る花の軌跡を追へば陶然と　斎
春のショールはパステルの色　代

連衆　旭　文代　副島久美子　八代　嫋
佐々木有子

平成十八年の山口県連句大会

（やまぐち連句会会長　諏訪欣二）

表記のようなテーマが与えられたのですが私には大変なことで、戸惑っています。平成十八年の国文祭での連句大会は山口県の岩国市由宇町で行われますが、当初、同県では連句の結社がない（勿論極めてひっそりと座をもっている集まりがあり、現在も続けています）とのことで没になっていました。然し国文祭の連句が山口県で途絶えることになってはいけないと予備的には働きかけていたところ「きらめき公募」で国文祭への参加が得られることになり、このことは先般の武生での連句大会でご挨拶申し上げた通りでございます。しかし、体力的にとても走り回ることが出来ない状態でしたところ、幸いにも周南市にお住まいの中本蒼水、七水御夫妻が事務局を引き受けてくださり、県庁に精力的に働きかけられ、お陰で現在に至っております。山口県では連句界で歴史をもった結社のメンバーの方がかなりいらっしゃいますが、俳句をなさっている方が多く、働きかけても、私の力不足で、ご協力いただけずというところです。ところで、山口県の地図をご覧になればお分かりの通り、東は広島湾、南は周防灘、西は玄界灘、北は日本海と、広範囲に海と接しております。そして古代から歴史的にもバラエティに富み、文化的に現在の山口市には京文化を模した大内文化が色濃く残っています。当時の日本でも大内文化は、格調高くその水準の高さを匂わせています。百済王家琳聖太子（？）より二八代の大内政弘の招きで宗祇（１４２１－１５０２）は一四八〇年六月來山口「池はうみ木ずゑは夏の深山かな」翌十三年春には政弘の第で百韻を興行し、発句「しら雲のたてるやいづこ花ざかり」を詠んだという。また絵画の方では水墨画の大成雪舟等楊が帰国後山口に落着き沢山の絵画を残し、素晴しい庭園を造っています。建物では山口にある瑠璃光寺五重塔が美しい。これは二五代義弘の弟の盛見が兄の菩提を弔って一四四二年に建立したものであります。京都の東寺の五重塔に比べると山口の空気のせいか、殊のほか綺麗であります。時代は大内から毛利へと移り萩が中心となり、維新を迎え吉田松陰、高杉晋作等により開かれた日本が今日に及んでいます。第二次大戦そして終戦山口県は兄弟の首相を輩出し、現在に至っています。「出身県でわかる人の性格」という本にも書かれている通り、何時の間にやら独特の県民性が培われ文化面においては、その発展になんとなく許容性の少ないことに寂しさを感じます。つまらない話はこれくらいにして二〇〇六年の国文祭について、連句大会が開かれる会場の由宇町は岩国市の南側になり、近くには錦帯橋という名橋があります。毛利一族の吉川公の居城があり、佐々木小次郎のツバメ返しを会得した所もその川傍にあります。山口県は東西に駄々広く名所旧跡は散在しておりますが、義経で有名な壇ノ浦のある下関などと、古代から今日に至るまで歴史的に豊かなところです。これでは観光案内になってしまいましたね。あらためて、国文祭での連句大会は二〇〇六年十一月十日（金）前夜祭、一一月十一日（土）連句大会、を予定しています。大会場には「山口県ふれあいパーク」があり、イベントホールや宿泊設備もあり、瀬戸内に向いた穏やかな場所です。私、猫蓑では脱線ばかりしており、皆様に迷惑ばかりかけていた劣等生ですが、明雅先生には勿論のこと会員の方々にはよきご指導をいただいておりました。諏訪ってどんな人といわれる年頃になっております。猫蓑は連句のグループでは最大のもので、皆様のご助力を仰がねばならず、何しろ準備期間も時を失しており現在までの各県で行われた連句大会ほどのことはとても出来ないと思いますが、私達はそれなりの控えめな小ぶりな形で成功させたいと思います。是非、皆様の後押しをよろしくお願い致します。

「初捌き」

市野沢弘子

昭和五十六年に開講した「朝日カルチャーセンター」連句講座は、午前中に「芭蕉七部集鑑賞」、午後一時から「連句作法を鑑賞」があった。私は当初、午前中の「芭蕉七部集鑑賞」の授業を受けていた。その仲間の大半は午後の授業も受けていたので「あなたも是非、連句実作の方へも来なさい」と誘われ、昭和五十六年の十月から、午前中の授業が終ると住友ビルの中で昼食をとり、午後から連句実作の授業を受けた。「芭蕉七部集鑑賞」の教科書は、厚さ四センチの『日本古典文学全集32』の「連歌俳諧集」であった。「こがらしの巻」から蕪村の作品まで講義はあったが、五十八年六月に明雅先生が体調をくずされてからは、午前中の授業はなくなり、連句実作の授業のみになった。さて肝心な初捌きであるが、五十八年の秋の事であったと記憶している。場所は、「日本近代文学館」で、庭の美しかったのを鮮明に覚えている。現在の様に毎日どこかで、連句の会が開かれている状況とは異って、教室以外で連句をすると言うことがなかったので、文字通り初めての捌きであった。また現在の様に、隣の席に先輩達が座ってサポートしてくれると言うこともなく孤立無援の状態であった。連衆の中に、親子ほどちがう男の方がいて、「あなたは面くいだ」と言われたが、「え、どうしてわかるのかなあ」と思ったりした。後でわかったことは、きれいな句ばかり取るとそう言われると言うことであった。何しろ、初めてだし、年齢的にも若輩の身であるので、連衆の方々が書き終るのを待って治定していたが、やはりその男の方から、「あなたは疲れる人だ」と言われた。待ってないで、さっさと決めなさいと言うことらしかった。物事に拘泥しない性質と言うより整理整頓の駄目な人間なので、その初捌きの作品は幻のものとなってしまったが、結局その作品は時間内に満尾しなかった。確か四時頃には退出しなければならなかった様であった。記憶の中の連衆の内、御三方は故人となって久しい。あれから何回捌きをしたのか数えたこともないが、満足できる捌きをいつかしてみたいと思う。

連句雑感

小池啓子

明雅先生直筆の「傳道之事」のお免状をいただいてから早五年を経ている。その後宗匠方主催の会や連衆の方々の勉強会に参加させていただいてきた。他門の方の捌きを受ける機会といっても国民文化祭に二度程出た程度であるが、その地方で俄かに集められた連衆に気遣い応援しながら、全国から駈けつけられた強者の皆様とわたりあってゆくのは新鮮な刺激だった。同座になった素敵な方とそのお宅へお邪魔し半歌仙を巻かせていただいたことも。大正末のお雛様を見せていただいた。

またこの間の日本画の個展では、絵に添えてあった拙句を発句にして来ていただいた方より一人一句いただき、二十韻を巻きあげるという試みがご連衆の後押しではじまり、会期中には満尾しなかったものの、句をいただきそこねた方々に追って文音していただいたりして満尾することができた。会場での臨場感のあるお句もあり、大切な記念となった。

このように一期一会の座を楽しもうという精神では誰にもひけをとらないつもりではある。一巻を巻いた連衆の方々のことはあざやかに心に残っている。でも楽しい、ふれあいがすばらしいとばかりは言っていられない。作品のレベルや自分の捌きとしての器量もそろそろ気になりだしてきた。勉強会などに参加させていただくと、皆様とてもよく古典など勉強されているのに感心する。私は研究より実践タイプで資料など読ませていただくばかりで申しわけない。名人の方々と同席の機会もあるのだから、自分の付けだけであっぷあっぷ状態から抜け出し、すばらしい捌き手の選句の仕方、全体の動かし方、出句のいいとこ取りをしてすばやく一直して適切な付けになさる様など、その場の空気を吸うように吸収できたら本当にいいのになどと考えている。静かに一巻の進行をみんなで味わう、そんな捌きができるにはまだまだである。

臭木の花

登坂かりん

自然は歳時記通りには動いてはいないよ、と諌めるSに連れられ、里山や水辺を歩くようになった。草や樹がかぶさるように生えた道をある日通ると、むうっと臭った。が、行き過ぎてしまい忘れて別の日通ると、また臭った。くさぎだよ、とSはソフトに言った。

クサギ（クマツヅラ科）の葉をちぎると、何ともいやな強烈なにおいがする。二～三メートルの落葉低木で、山間の谷間などに三々五々固まって生える。八～九月ごろ、枝先の倒円錐形の花序に、白い花が芳香を放って沢山咲き、花冠の上には一本の雌しべと四本の雄しべがつんつんと突き出し、同下方は五片に裂けた赤い萼が囲む。秋、萼は平開していよよ赤みを増し、その上にやがては瑠璃色に熟す実がのっかる…。（『A歳時記』より）

行き過ぎて常山木の花の匂ひけり　富安風生

煮た豇豆の色で質素な風情の花、古くは染料に用いられたその実の歴史がまず、私を魅了した。十～十一月はその成長のプロセスを十分に楽しむ。今年遅かった紅葉も一気にその美しさを見せ、やがては青白く光る雪虫が跳び、小春日のユスリカのダンシングがそちこちで始まった十二月初めのある日、家に帰るなり私は急くように、水壺さん（今宮雄二氏）の句集『長嘯』をめくっていた。

口づくる敗れし国の岩清水　（昭和20年）

飯盒が夜寒の影を置くばかり　（昭和22年）

旅よこのカンカン帽も戦経て　（昭和23年～25年）

両吟をよくしていた頃の、それは水壺さんの大の苦手な溽暑の日だった。喫茶店の席に着くなり、また一人戦友を失ったよ、と好きな珈琲にも手を付けず、涙ぐんだまま、僕だって戦争に行ったんだよ・・・この切なさは分かるまい・・・と俯くのだった。

宿無しのうかとジングルベルに乗る　（昭和25年）

お宮日の町にジンタは旅の者　（昭和30～31年）

ギヤマンに一夜おぼろの偽故郷　（昭和49～50年）

捨てねばならなかった長崎・稲佐への深い深～い望郷の句が切々と胸を打つ。そしてしたたかに雹降りし夜のはしご酒　（昭和53～54年）

と水壺さんらしい一句のあと、涙、涙……と呟きつつ頁を繰る指先に、すうっと懐かしいあの臭いと共に、臭木の花の字が近づいた。

涙もろきを臭木の花に知られけり　（昭和58年）

句集はだいぶ前に頂いていたが、気持を込めて味わえるようになったのは水壺さんの亡くなられた三年前の雨水の日から、である。

この句の臭木の花はどこの山間のものやら今は聞くこともできないが、涙もろきの字のみが記憶され、知らない変な名の木は行き過ぎて来てしまったのだろう。が、もう忘れられなくなった。「臭木の名はこの臭気にちなみ、一度試したら忘れられない木」とA歳時記にもあるように――。

風が凪に変わった。枯れ臭木ばかりとなった頃、落葉の中へ必死にもぐり込む亀虫を見た。アカスジキンカメムシ、と覚えたての名を私が正確に言うと、別名パンツ虫とも教えたろ、と科学者Sは稍きつく付け加えた。

「ゑにしかな」

武村利子

いまに思えば、ああそうだったか！と感じる事は多々ある。

私は幼いころ、日本橋に住んでいて、大磯坂田山に住む伯母の家へ電車に乗りよく出掛けた。大船駅に近づくと右側車窓の小高い丘の上の、優しいまなざしの白衣観音像を拝した遠い記憶がある。

時は移り、平成四年三月三日に桃雅会が誕生した。その二・三年あとだったと思う。桃雅会へ一番に参加された故猪子春治さんは当時、高年大学卒業者で作っておられた「四葉会」の会長で、会の親睦に「熱海、鎌倉の吟行の帰りに大船観音に寄り、壽子先生の句碑を見ませんか」と計画され、それに参加した。

観音様の膝元に句碑は抱かれるようにあった。

平成元年四月吉日

御前に結ぶゑにしや紅しだれ　杉山壽子　献句

三浦正雄　建立

大蔵大雄　書

句碑建立の経緯を壽子様から聞いたとは思うのだが、はっきり理解しないまま今日に至った。改めて、壽子様の言葉を書き留めたい。

「曹洞宗総本山永平寺貫首宮崎奕保（えきほ）禅師様が、鶴見の総時持寺貫首であられた頃に、私のささやかな句集がお手元に届き、後書きから最初の頁に載せた一句までの空間になんともいえない優しさがあり、それに心ひかれたとのこと。清々しい句集であり、俳人といえば自己主張の多いひとが多いが、この処女句集はそれがないと仰った。その頃、東急の五島一族の懐刀をしておられた三浦様が奥様を亡くされ、その供養のために、大船観音寺の全苑を改庭し山門もご寄贈され、そこに人との縁をかんじられる句碑を建てたいとの計画をされていた。そこに私の句集が飛び込み、禅師様の目にとまったのネ。句集が一人歩きをしたのでしょうネ。仏様からの賜りの句碑なの・・。大船観音寺大倉ご老師が書で・・。連句以前のことだから・・。永平寺貫首御禅師様は、現在百五歳でお元気にしておられるが、句碑にかかわった三浦様も大倉様ももう亡くなられ・・」と。

平成十七年四月十一日、連句協会総会の帰路、大船駅に下りて観音様までの坂を登る。

掃除の行き届いた境内の一隅に「縁結びめおと桜」のしるべがあり、枝振りも立派に成長した紅しだれが満開であった。建立より十七年の歳月が流れている。白衣観音様のお膝に抱かれた句碑は花の雨にしっとりと包まれていた。眼下には静かな町並みが望まれ、心がほっとする場所。

壽子様は「れぎおん」に「名古屋は連句も宣伝をしないだけで、気持ちの良い連句をしているだけ・・」と書いておられるが、私は句碑の事は絶対に書いておきたいと思った。過日猫蓑会で、郁子奥様に大船観音様にある句碑の写真をこっそりお見せしたところ、明雅先生も奥様もご存じなかった由、いかにも壽子様らしいと感じ入った。皆様も大船方面にお越しの際は花の頃に尋ねて下さい。

花の雨大船白衣観音へ　利子

伊勢派散策⑦「根津芦丈」
蕉風俳諧を現代へ

橘　文子

根津芦丈先生は明治七年（一八七四）長野県伊那村山寺に生まれる。本名九市。抱虚庵三世、苧庵。二十一才の時から馬場凌冬に俳諧を学ぶ。明治二十七年（一八九五）凌冬の興した円熟社社員となる。はじめ、生花庵青隣と号す。明治三十年凌冬師より伝導の書を受け、この年、号を芦丈に改める。五年後、凌冬師急逝。大正七年松永蝸堂より抱虚庵を贈られる。大正十年（一九二一）円熟社顧問となり、昭和七年二月（一九三二）社長に就任。同年九月伊那市山寺に苧庵を建て、俳諧を主とした生活に入る。

中村竹邨と「山一重」（昭和五年）増田龍雨、中村竹邨と「下蔭三吟」（昭和十二年）を共著出版、当時の沈滞していた連句界に新風を起した。

戦後は、俳諧伝統の保持者として、全国を行脚し連句の復興を図り、昭和三十四年から都心連句会を、三十六年からは、松本の信州大学連句会を指導。既に卒寿を越えた昭和三十九年から、連句専門誌「山襖」を創刊、編集、校正、発送を独力で行い隔月発行、連句の普及、特に芭蕉の心法を伝えることに力を尽くした。

昭和四十二年十月病床に伏し、円熟社社長を辞任。「山襖」は昭和四十二年十二月号、通巻二十四号で終刊。昭和四十三年二月十四日涅槃に入る。二月十六日、伊那市西町弥生ケ丘の長桂寺に於いて俳諧葬が行われ、同寺の墓地に葬られた。伊那市春日公園に句碑。

眠り落し山の灯月は天心に　芦丈

冬うらら死に下手昼も寝てばかり　芦丈

寒梅香る日あがりの縁　文子

前号に掲載した伊勢派⑥馬場凌冬のうち、凌冬、青隣（芦丈）両吟の「星月夜」の巻に読み難い箇所がありましたので、その部分の読みを再度掲載致します。

「星月夜」

ウ四　一寸広げて傘（からかさ）をかす

ウ五　唐丸の鶉ほどにも足らぬ矮鶏

「唐丸」鶏鶏とも書く。長鳴鶏の一種

ナウ三　浮雲（あぶな）しとあとを見送る高足駄

「あぶなし」を「浮雲し」とする表記は、浮雲の不安定な状態からこの字を充てたとされ、一二三二年頃の「建礼門院右京太夫集」初出、明治生まれの人には、普通に使われていたようです。

事務局便り

◇入賞おめでとうございます。

第二十回国民文化祭

国民文化祭実行委員会会長賞

鈴木了斎「家捨つる」

◇新入会員紹介

水上潤子（みずかみ・じゅんし）越前市

高山貞和　横浜市

◇猫蓑会発展基金に

ご協力有難うございました。

片山多迦夫様　俳諧あしべ塾　一万円

諏訪欣二様　五千円

橘文子様　一万円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店

普通３３７６０４５

猫蓑基金

◇猫蓑会四月例会

日　平成十八年四月二十六日（水曜日）

時　正午より十七時（受付十一時半）

場所　亀戸天神社

江東区亀戸三－六－一

０３－３６８１－００１０

◇猫蓑作品集第十六号は四月発行の予定です。

◇平成十八年の国民文化祭の募吟には奮ってご応募お願い致します。

◇訃報

十二月三日、ご療養中だった卯遊庵蒲原志げ子様が亡くなられました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

季刊　『猫蓑通信』第六十二号

発行人　猫蓑会　青木秀樹

〒１８２－０００３

東京都調布市若葉町

二－二十一－十六

編集人　猫蓑通信編集部